Japanese Literature — 33

現代日本の文学

檀一雄
織田作之助集
田中英光

〈監修委員〉
伊藤整
井上靖
川端康成
三島由紀夫

〈編集委員〉
足立巻一
奥野健男
尾崎秀樹
北杜夫
（五十音順）

学習研究社

現代日本の文学
33
全50巻
分割払価格　39,000円
現金価格　35,500円

檀　一雄
織田作之助集
田中英光

昭和45年11月1日　初版発行
昭和48年5月1日　十版発行
著者　檀　一雄
　　織田作之助
　　田中英光
発行者　古岡秀人
発行所　株式会社学習研究社
東京都大田区上池台4-40-5
郵便番号 145　振替東京142930
電話　東京(720)1111(大代表)

印刷　大日本印刷株式会社
　　中央精版印刷株式会社
製本　中央精版印刷株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙クロス　東洋クロス株式会社
製函　日本紙パルプ商事株式会社

＊この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145) 学研「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学係へ、電話は、東京(03) 720－1111 内線352,353か、東京(03) 727－1600へお願いします。

© 1970 Printed in Japan
0393－164 633－1002

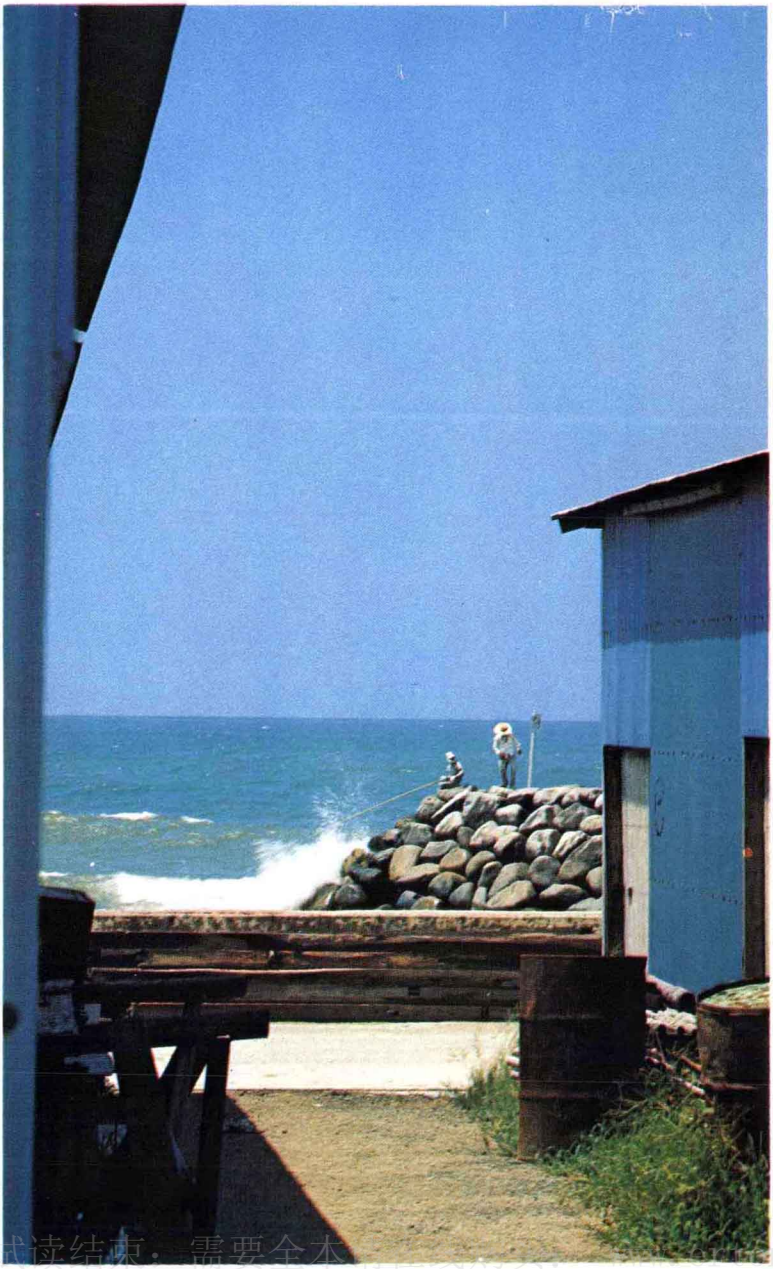
檀一雄・織田作之助・田中英光
文学紀行

檀一雄文学紀行

私は今日では、柳川の祖父の家をなつかしむ……

……柳川の家の生活はユーモアがあった。精気があった。余力があった。（「母」）

檀一雄が幼年時代を過した福岡県柳川市。水郷とよばれるにふさわしく、町の縦横を掘割が走り、土蔵の白壁が水面に深く影をおとす



试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongb

佐賀県唐津市近郊の虹の松原
（「花筐」）

右　「着きましたよ」リツ子がいかにも嬉しそうにこう云っている。芸もない、のどかに鎮まった海辺の村のようだった。　（「リツ子・その愛」）

その町は先ず架空の町であってもよい。が、譬えもなく青い海が町の戸毎に間断のない波の音を運んでいた。（「花筐」）
佐賀県唐津市近郊の鏡山より虹の松原、唐津湾をのぞむ

左　有明海にのぞむ、福岡県柳川市沖端の夕景

不動明王

左　大阪法善寺横丁正弁丹吾亭の前に建っている織田作之助文学碑

下　新規開店に先立ち、法善寺境内の正弁丹吾亭や道頓堀のたこ梅をはじめ、行き当りばったりに関東煮屋の暖簾をくぐって、味加減や銚子の中身の工合、商売のやり口などを調べた。（「夫婦善哉」）

大阪法善寺横丁

右　浜子は不動明王の前へ燈明をあげて、何やらわけのわからぬ言葉を妙な節まわしで唱えていたかと思うと、私たちには物も言わずにこんどは水掛地蔵の前へ来て、目鼻のすりへった地蔵の顔や、水垢のために色のかわった胸のあたりに水をかけたり、タワシでこすったりした。（「アド・バルーン」）

大阪・水掛不動

下　大阪道頓堀の夕景（「夫婦善哉」）

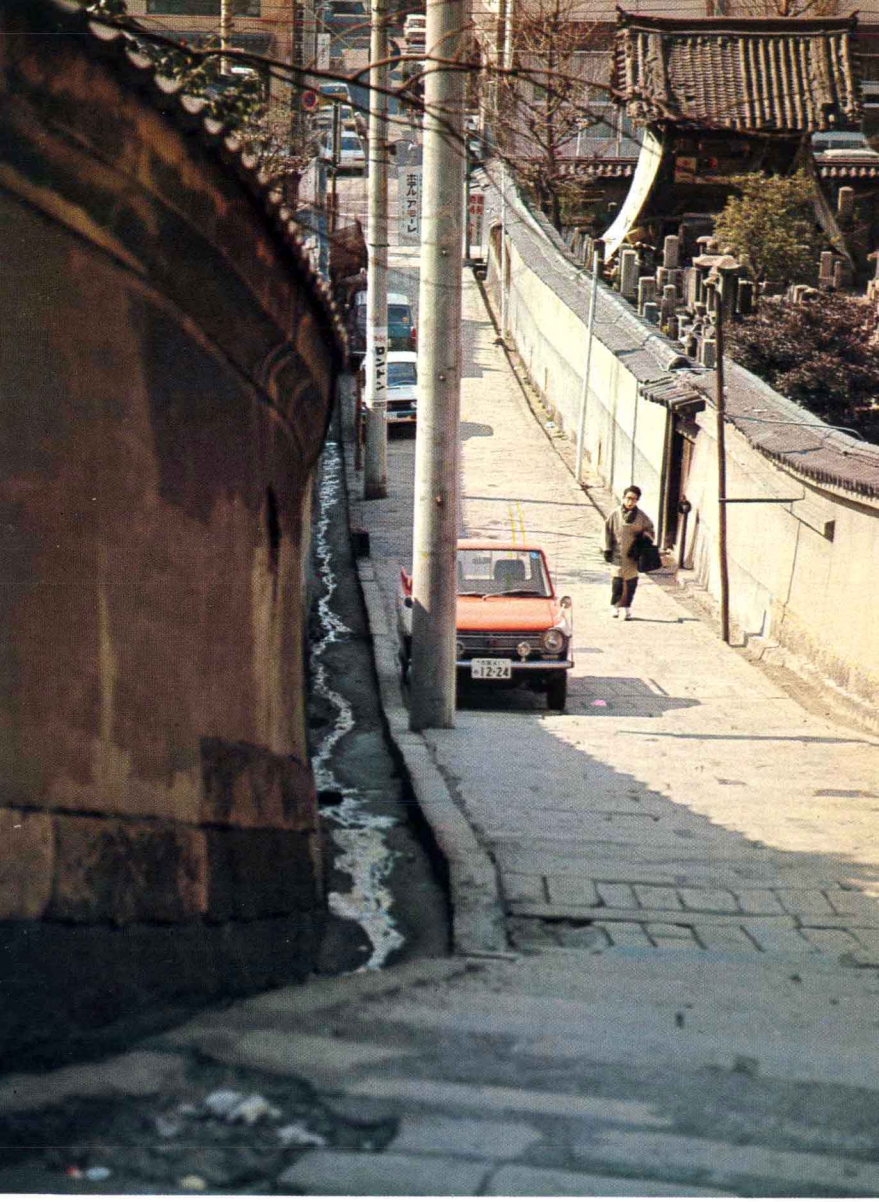
左　四条通りを横切ると、木屋町の並木は、高瀬川のほとりの柳も舗道のプラタナスも急に茂みが目立った。（「土曜夫人」）京都・木屋町

试读结束：需要

四条から満員の電車に押されながら乗って来て、じっとりと汗ばんだ体に、加茂の流れを吹き渡って来た風は、さすがに気持がよかった。しかし、ただ気持がよいだけではない。川風も生暖く春めいてふと悩ましい。(「それでも私は行く」)　京都・鴨川公園

左　先斗町と書いて、ぽんと町と読むことは、京都に遊んだ人なら誰でも知っていよう。しかし、なぜその町――四条大橋の西詰を鴨川に沿うてはいるその細長い路地を、先斗町とよぶのだろうか。(「それでも私は行く」)京都・先斗町

下　円山公園を抜けて一休庵へ行く途中、古びた低い門をくぐると左手に高台寺の見える細長いさびれた道がいかにも京都らしいしずけさの中に伸びていた。
京都・高台寺道(「それでも私は行く」)



数多い坂の中で、地蔵坂、源聖寺坂、愛染坂、口縄坂……と、坂の名を誌すだけでも私の想いはなつかしさにしびれるが……(「木の都」)　当時とはかなり趣が異ってしまったが、織田作之助の愛した坂のひとつ大阪源聖寺坂

田中英光文学紀行

遙か、浅草の装飾燈が赤く輝いています。時折、言問橋を自動車のヘッドライトが明滅して、行き過ぎます。すでに一艘の舟もいない隅田川がくろく、膨らんで流れてゆく。チャップチャップ、船台を洗う波の音がきこえる、ぼくは小説めいた気持でしょう。死にたくなりました。死んだ方が楽だと、感じたからです。(「オリンポスの果実」)

向島言問橋より隅田川をはさみ浅草の夜景を見る

www.ertongb